第１部　町家を活かしたまちづくりによる地域活性化戦略

上越市創造行政研究所

市民研究員　磯田　一裕
〃　木村　雅俊
〃　佐藤　和夫
〃　菅原　邦生
〃　関　由有子
〃　鳥原　友樹
〃　中村　　孝
〃　廣田真知子
研　究　員　石黒　厚雄

第１章　わがまちの資産としての町家

1－1　高田のまちの歴史背景

高田のまちは、江戸時代初頭に当時の身分制と軍事・経済面での都市計画に基づく計画都市としてつくられ、以来、近世・近代・現代の約400年間にわたり、上越地方の政治・経済・文化の中心地としての機能を担ってきました。

昭和46年の上越市誕生後には、春日地区への行政機能の移転や、上越インター周辺への郊外型大型商業施設の集積などにより中心市街地としての位置づけが低下していることは否めませんが、上越地方全体の顔としてその存在は依然大きなものがあります。

本節では、町家を活かしたまちづくりを進めていく上で欠かすことができない高田のまちの歴史背景について、町家が形成され衰退してきた経過、現代の高田のまちに残る歴史的建造物やそれらにまつわるエピソードという観点から振り返りたいと思います。

(1)　高田城下町の始まりと特色

高田城は、慶長19年（1614）に徳川家康の六男松平忠輝の居城として築かれました。

高田の城下町は、城を凹字型に取り囲むように設けられており、城の近くから重臣の屋敷や一般の侍屋敷（家中）、その周りの西・南・北側の三面に町人町、さらにその西側には寺町が配置され、身分制と軍事・経済面での都市計画に基づく典型的な城下町として、表1-1のような特色をもっていました。

表1-1　城下町の特色

1．領内の軍事上の最重要地で、防衛の仕組みがあった
　・道を屈曲させて見通しのきかないようにしてあった。
　・そして寺院、重臣の配置などをたくみに配置して防衛上の考慮が払われていた。
2．領内の政治上・経済上・交通上の中心地
　・高田では、築城に当たり北国街道を町の中央に通し、それまで起点が直江津であったのを高田とした。
3．家中（武士の屋敷町）と町人町の区別があった
4．同業者が集住していた
5．特権を持った町
　・城下町の保護のため、地子銭免除、株仲間の保護など城下町の繁栄を図って多くの特権が与えたれていた。
6．他の城下町との交わりが許されなかった

出所）『歴史がつくった景観　久比岐風土記』久保田好郎編著
㈲文美堂書店　平成元年　より引用（一部省略）

同業者を一ヶ所に集住させ職業名が町名となっているのはどの城下町にも通じることで、営業の利便性と仲間の自治的統制を考えての政策でした。

また、寺町の設置は防御だけでなく、町の繁栄策としての目的もありました。寺の縁日は多くの参詣人でにぎわい、高田別院の「おたや」などはその代表的な行事であると言えます。

なお、高田の城下町は、加賀街道・奥州街道・信州街道の三つの街道が通る交通の要衝でもあり、街道筋の宿場町としての機能も兼ね備えていました。

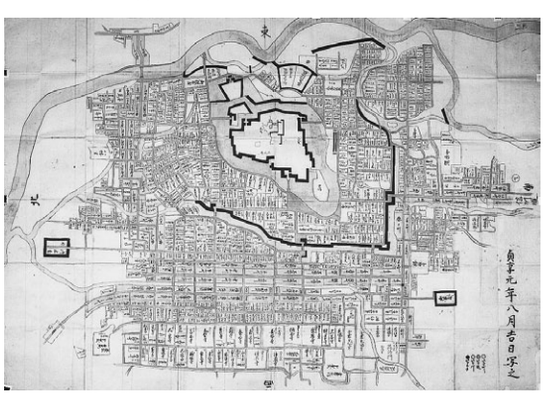


図1-1　松平光長時代の高田城下町
出所）『上越市史』資料編４　近世一 付図１　高田城下町絵図
松平光長時代（延宝期）上越市立高田図書館所蔵

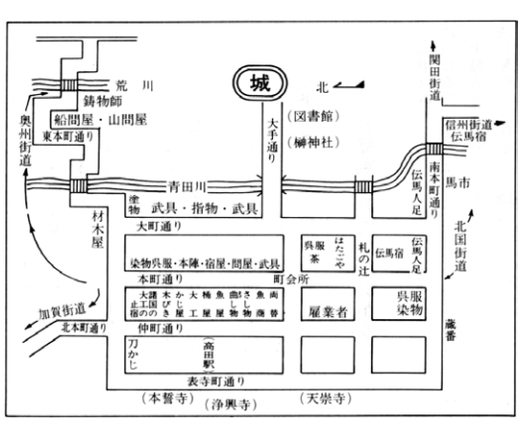


図1-2　高田城下の町人町配置図
出所）『高田市史』第１巻

⑵　江戸時代の高田城下町の政治・経済

高田藩は、初代藩主の松平忠輝の時代は越後一国と信州川中島を領する大大名※１であったものの、その改易後は藩主の交代が続き、所領も狭められ、震災や飢饉が重なるなど、越後第一の藩でありながらも藩の財政は苦しい時代が続きました。

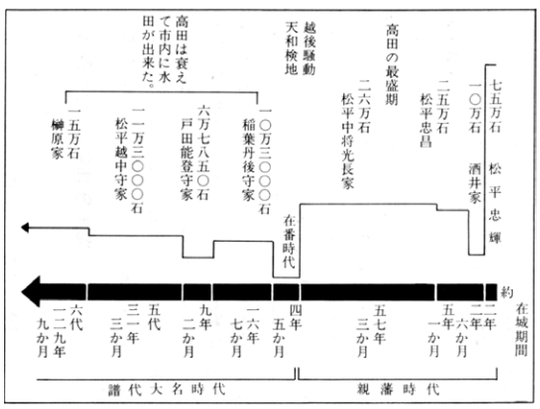


図1-3　高田藩の藩主の交代

出所）『高田市史』

※１松平忠輝時代の石高は一説には75万石（図1-3）と言われているが、最新の見解（上越市市史編さん室）では45万石とされる。

このような中で高田藩が最も栄えた時代は、越後中将と称えられる松平光長の時代（1624～1681）で、この頃には高田の都市としての骨格が定まったと言われています。また、雁木の研究の第一人者ともいえる氏家武氏の説によると、高田の町並みの代名詞とも言える雁木の町並みはこの頃定着したとされています。

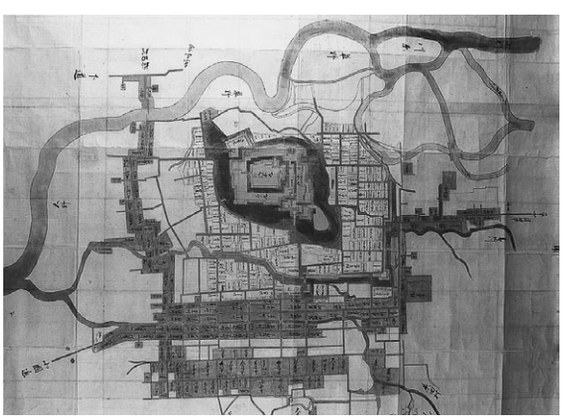


図1-4　榊原時代の高田城下町

出所）『上越市史』資料編４　近世一 付図２　高田城下町絵図
榊原時代（幕末期）上越市東本町　植木實家所蔵

商業都市としての高田のまちは、歴代藩主の商工業保護政策の下、豊かな農業生産を生み出す周辺農村や外港としての直江津今町に支えられながら、表1-2のように多様な職業構成をもつ越後第一の都市として成熟していきました。

表1-2　正徳年間（1711～16）の高田町の職業構成

職　業	人数	職　業　別　人　数
食品製造販売	194	肴小売145　信州問屋18　肴問屋12　八百屋６　菓子屋４　町調理人４　四十物屋３　塩問屋２
林産加工販売	171	桶屋71　木挽52　檜物屋19　塗師屋８　材木屋７　山木丸太商売５　さし物屋４　椀屋２　爪作り１　竹とうし屋１　五器屋１
建築関係	274	大工132　屋根屋57　蔀53　畳屋13　表具屋８　左官５　井戸掘６
金属加工販売	130	野鍛冶・張多鍛冶109　鍋屋11　金具屋５　かざり屋３　やかん屋１　鍋のいかけ１
武具等製造販売	32	さや師塗師屋13　研屋12　刃物鍛冶２　鞘屋１　柄巻屋４
衣類製造販売	89	紺屋55　仕立屋19　紺屋の形付け６　紋問屋６　足袋屋２　縫屋１
風俗営業	70	旅籠屋59　湯屋11
雑貨販売	33	蝋燭屋11　筆屋７　からかさ挑灯張１　挑灯張３　傘屋３　箸屋３　合羽屋１　古道具販売１
その他	58	座頭22　ごぜ12　掘物家５　小船４　乗物屋３　手習師匠３　本陣２　馬問屋２　絵師２　鑷子屋１　諡師１　秤屋１

出所）『新潟県史』通史編３により作成

藩主の交代に伴い家中は住民が変わったのに対し、町人町はほとんど移動がなく高田のまちでは町人文化も栄えました。俳諧や俳文などの文芸をたしなむ町人も多く、文化11年（1814）には、『東海道中膝栗毛』の著者として有名な十返舎一九が善光寺参詣の足をのばして高田を訪れ、春日町（南本町３）の高橋孫左衛門商店（現在も同地で営業（図1-5））の手厚いもてなしを受け、『諸国道中金の草鞋』の中で「高田城下に至る。当国一の御城下にて繁昌の処なり。（中略）毎日見るもの聞くものにつけて即席の狂歌を試みて楽しみけり。この所、肴は新しく沢山にて、酒もよし。五日逗留したれども飽かず。」と高田のまちをほめちぎっているエピソードもみられます。

図1-5　高橋孫左衛門商店

（下写真）
十返舎一九の『諸国道中金の草鞋』で紹介された高橋飴屋の店頭のにぎわい

出所（南本町３　高橋孫左衛門蔵）

⑶　明治維新後の高田

明治維新の諸改革の中、明治４年（1871）7月の廃藩置県によって高田藩は高田県となり、同年12月には高田県が廃止されて柏崎県に編入されました。これによって越後の国での高田の中核都市としての地位、さらには頸城地方が越後国府の時代から約千年の間確保してきた政治・経済の指導的地位が失われることとなりました。

また、武士階級が消滅した後の高田は、主だった産業を持たなかったため、まちの経済も立ち遅れたものとなっていました。その中でも羽二重織物・バテンレース・ブレードなどの繊維工業や、粟飴・翁飴・米菓などの製菓業などの軽工業が興り、特にバテンレースは高田の特産物に発展し細幅織物産業は全国一の生産高を誇った時代もありました。

図1-6　明治中頃の高田の町並み（本町３）

出所）『ふるさとの想い出写真集 明治大正昭和 高田・直江津』（国書刊行会）より

図1-7　明治末期の高田の町並み

出所）『上越のいまむかし』（国書刊行会）より

明治政府の殖産興業政策が進む中、産業経済の発展のため銀行制度も整えられていきましたが、高田では明治12年（1879）、呉服町（本町３、現第四銀行㈱高田支店（図1-8）の所）に高田第百三十九国立銀行が設立され、以後明治年間に９つの銀行が設立されました。

図1-8　第四銀行㈱高田支店（本町３）

⑷　上越地方の地域開発の進展

数々の偉人たちの活躍により、頸城地方では、石油採掘・鉄道建設・電源開発といった地域開発が進み、これらが直江津地区での近代工業発展の礎となります。また、高田のまちも高田駅の新設に伴い、駅前から本町通りまで東西の連絡道路が造られるなど、道路の改修が行われました。

表1-3　明治時代における上越地方の主な地域開発

○石油採掘

・明治6年頃板倉町での油田開発に端を発し、上越地方では石油ラッシュが起こった。同年には鍋屋町（東本町５）には石油精製所ができ、その後現清里村との間に日本初のパイプラインが敷設された。

○鉄道建設

・明治21年12月の信越本線の開通は、わが国の長距離線としてはもっとも早いものであった。なお信越本線は、頸城地方の豊かな米や石油を大量に首都圏へ輸送し、日本の近代化に大きく貢献した。

○電源開発

・明治39年の上越電気株式会社（同社の社屋は現在の東北電力㈱高田営業所（図1-9）となっており、市内に現存する鉄筋コンクリート造りの建物で２番目に古い）設立に伴い関川水系で電源開発が進んだ。明治40年竣工の蔵々発電所は県内最古の発電所であった。

図1-9　東北電力㈱上越営業所（大町２）

⑸　第十三師団の誘致

このような状況の中で、陸軍第十三師団誘致の成功（明治41年入城）は、高田のまちにとって軍隊の消費という新たな経済基盤の獲得につながりました。

軍隊や軍人の消費を巡って高田のまちの商工業はにわかに活況を呈すこととなり、旅館・銀行・市役所（明治44年市制施行）・警察などの建物が次々と西洋風に建て替えられるなど第十三師団の入城はまちの文化にも大きな影響を与えることになりました。

また、明治44年にはオーストリアのレルヒ少佐が第十三師団を視察に訪れ、その時にスキーの指導を行ったことが、本市が日本スキー発祥の地と言われる所以となっています（その後高田のまちではスキー工業も発展することになります）。

大正時代に入ると高田ガス会社が興り（大正２年）、高田のまちに青白いガス燈が灯りました。（現存している町家の中にはガス燈の配管が残っているお宅もある）この頃農機具製造業も興り、高田の重要な産業となっていきました。

図1-10　兵隊でにぎわう初春の本町通り（本町２）
出所）『ふるさとの想い出写真集 明治大正昭和 高田・直江津』（国書刊行会）より

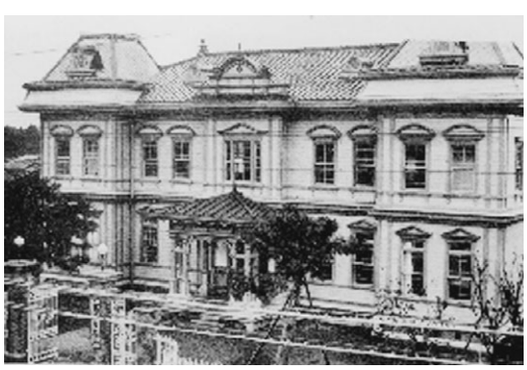


図1-11　高田市役所（現存せず）
出所）『上越のいまむかし』（国書刊行会）より

図1-12　高田館（現存せず）
出所）『上越市史』普及版（幸町 渡辺善雄氏提供写真）より

図1-13　旧師団長官舎（大町２）
※大町２に移築：現市指定文化財

図1-14　高田日活（本町６）

⑹　太平洋戦争中の高田

昭和12年（1937）、日華事変が始まった頃から高田の産業も次第に戦争のためのものに変り、多くの人々が軍需工場で働くことになりました。

また、戦況が悪化する中、大都市からの疎開児童たちは市内の学校で学ぶようにもなりました。

昭和20年（1945）になると、５月には直江津の工場地帯に爆弾投下があるなど、高田の人々の不安は一層募り、６月末には高田の町なかの建物の強制疎開の指令が発せられ、重要建物付近や町の辻の両側、十字路付近の家々では、家屋を壊して立ち退くように命じら

れ、次々と建物が壊されていきましたが、全てを壊し終わらないうちに終戦の日を迎えました。

高田のまちは爆撃を受けることなく現在にその町並みをつなげることができたのです。

⑺　終戦後の高田

戦後の連合国軍による占領時代には、高田にもアメリカ軍が進駐してきました。このときのエピソードとして「雁木に吊るした漬物用の大根は、占領軍の兵士の通行の邪魔になるので取り外すように」という通知が市から市民に対して出されたこともあったそうです。

図1-15　大根干しの風景

出所）『上越のいまむかし』（国書刊行会）より

ＧＨＱによる日本の非軍事化と民主化の諸改革の一つとして農地改革も進むことにより地主制は消滅し、周辺の農村社会の様相は大きく変わることになります。

日本社会全体が高度経済成長期に入り、産業構造が農林水産業などの第一次産業の比重が低下し、第二次・第三次産業の地位が高まってくると、農家の兼業化の進展や農業機械の導入により、地場産業であった農機具各社は販路を全国に拡大するなど、高田の経済も一層成長しました。

⑻　市町村合併と高田市街地の拡大

昭和28年「町村合併促進法」が施行されると当時の高田市は、昭和29年4月に金谷・新道村を合併、翌年4月に津有・三郷村及び春日・諏訪・和田村の一部、同年6月に新井市から稲荷を編入、昭和34年11月には高士村を合併し、人口７万４千人を超える都市となりました。

新生高田市では、都市基盤の整備が進み、昭和39年着工の北城土地区画整理事業（総面積約24ha、住宅個数約千戸）は昭和30・40年代の高田市最大の都市計画事業でした。

昭和40年には、日本都市計画学会は、『新潟県 高田・直江津地域広域都市計画』を発表し、これをマスタープランに高田・直江津両市とも新しい都市計画を策定することになり、高田市では昭和43年に、昭和60年を目標に市街地面積が二倍になることを想定した都市計画地域の用途指定を行いました。

昭和27年６月からは、直江津・高田間をつなぐ国道11号線（後に一級国道18号線に昇格。現上越大通り）の改修が進み、その沿道には新しい集落が形成され、この地域の経済大動脈として両市の距離が縮められていきました。

このような市街地の拡大が進む中、高田・直江津両青年会議所の熱心な合併促進運動が市民や行政・議会を動かし、昭和46年４月29日現在の上越市が誕生することになったのです。

⑼　本町商店街の発展と近代化事業

日本経済の高度成長に伴い、高田の商業は急速に発展し、昭和30年代から40年代、市内の商業は商店街を中心に活況を呈しました。

図1-16　高田商店街の“たなばた祭り”

出所）『戦後50周年記念誌 50年の歩み』（上越市）より

本町３・４・５丁目は、上越地方の中心商店街であり、屋上遊園地と映画館を併設していたいづも屋百貨店はその象徴ともいえる存在でした。

しかし、商店街の繁栄の一方で、江戸時代の都市構

造をほぼそのまま継承してきた高田市街地は近代化が必要となっていきました。慢性的に渋滞する狭い道路網、ゆっくりと買い物ができない狭い雁木、老朽化した木造の個別店舗といった問題を解決するための都市改造が検討されるようになります。

図1-17　本町通りの様子

出所）『戦後50周年記念誌 50年の歩み』（上越市）より

昭和42年には「本町３・４・５丁目商店街近代化推進協議会」が発足し、近代化へ向けた勉強会が重ねられました。昭和46年に同会は、新生上越市と同議会に対して都市改造の基本計画策定を要請し、以降市・県が調査検討を進めることになりました。

その後、昭和53年７月には本町大町土地区画整理事業が県知事の事業認可を受け、昭和55年４月から本町通りの拡幅工事が本格的に始められましたが、同事業決定の過程では、反対・賛成の声が激突しました。

同年12月には第一期近代化として本町３丁目西側が完成し以降順次工事が進められ、事業が全て完了したのは、平成４年10月のことでした。こうして本町３・４・５丁目の商店街は、雁木と町家の町並みから、明るく広いアーケードが連なる近代的な町並みへと変貌したのです。

図1-18　完成したアーケード

出所）『戦後50周年記念誌 50年の歩み』（上越市）より

⑽　ロードサイド型商業施設の展開

昭和50年代以降には、複眼都市の解消という当市独自の要因と、モータリゼーションの進展が重なり、国道18号線（現上越大通り）沿線地区に商業施設が展開するようになり、上越初の郊外型総合大型スーパーとしてナルス・ホームプラザが藤巻に出店したのは、本町商店街の近代化が検討されていた最中の昭和51年のことでした。

昭和51年当時の上越市は、長崎屋高田店や大和上越店など、市内に７店の大型店が営業する状態となり、激しい販売競争が起こっていました。ロードサイド型商業施設の展開は、既存の高田・直江津両市街地の中心商店街を脅かすようになり、いづも屋百貨店も昭和60年２月に本町５丁目の店を閉め、同年11月にはイヅモヤジャスコ高田店として土橋に出店しました。

⑾　上越ＩＣ周辺の商業集積と中心市街地の危機

このような郊外型商業の展開により、高田・直江津の中心商店街は極めて厳しい状況に立つことになりました。平成４年（1992）の改正大店法施行に伴う大型店出店規制の緩和により、北陸自動車道上越インターチェンジ周辺の富岡地区や関川東部地区の開発と同地区への大型店の出店が加速し、中心市街地商業の苦境は一層深刻な様相を呈することとなり現在に至っています。

図1-19　整備が進む上越インター周辺の新市街地

1－2　高田の町家の特徴と魅力

高田の町家は、雪国の城下町における先人達の知恵・技・文化を現代に伝える本市を代表する歴史的建造物です。

町家がもつ太い梁や吹き抜け空間、雁木と共に形成している町並みなどは、現代を生きる私たちにとっても大きな魅力を有しており、これからのまちづくりの資源として大きな可能性を秘めています。

本節では、わがまちの資産としての町家の特徴や価値について整理したいと思います。

1．町家について

町家とは、街路沿いに軒を連ねて櫛の歯のように隙間なく並ぶ都市の住居です。

高田の町家は、切妻造の屋根をもち、棟が街路に並行している平入りとなっているのが特徴で、まち全体が長屋のように連なった景観を形成しています。

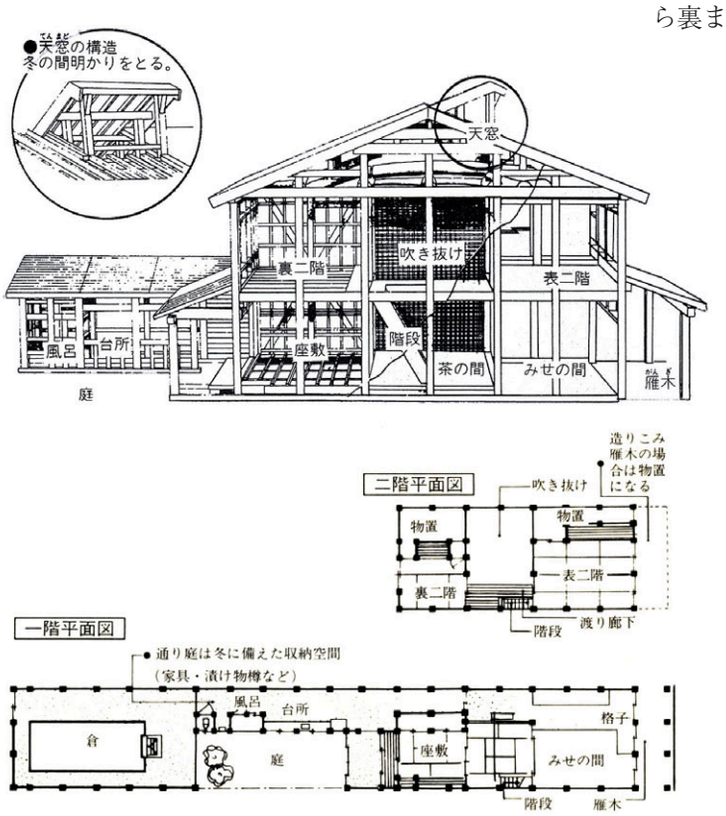


図1-20　町家の構造のイメージ図

出所）『わがまち上越の歴史』より

図1-21　町家の町並み（南本町３付近）

(1)　間取り

町家の間取りは、正面の雁木通りの方から「みせの間」「茶の間」「座敷」の順に配置される１列型が基本で、建物の正面に向かって右か左のいずれかの側に「通り庭」という土間があり、部屋の横を通って建物の表から裏まで下足のまま移動できるようになっています。

図1-22　町家の町並み（本町２）

図1-23　町家の町並み（本町７）

通り庭の奥には中庭に面して台所や風呂、便所が配置されており、そのさらに奥には土蔵が配置されているのが標準的な構えです。

図1-24　旧桶屋の町家（仲町４）

図1-25　旧呉服屋の町家（本町１）

図1-26　旧呉服屋の町家（本町６）

⑵　敷地

間口が小さく奥行きが長い敷地の形状は高田の町家の特徴的な点です。高田の町家の間口は、狭いもので１間半、大きなもので５間以上あり、平均的には概ね２間半～３間の間口のものが多くなっています。

また、敷地規模に対して建築面積や延べ床面積の割合が小さく裏側の庭や空地が大きい点も高田の町家の特徴と言われています。

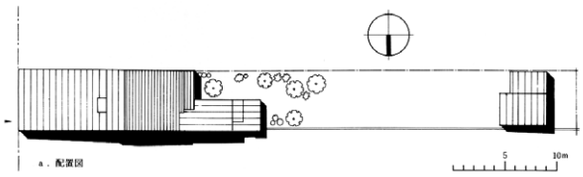


図1-27　町家の敷地の形状の一例

出所）『越後高田の雁木』（上越市教育委員会）より

図1-28　細長い敷地奥の畑

⑶　みせの間

みせの間は基本的には街路に面した商機能を持つ空間で、商業を営む家では、前面一間通りを土間にして残りを板敷きにしたり、全面を板敷きにして商品を展示したりします。商業を営まない家では畳敷きとなり、茶の間の前室あるいは私的な居室に転用されています。

建物の正面側前面は、みせの間の前面全体を開放できるようにガラス戸となっている家屋、格子戸となっている家屋、それらが組み合わさっている家屋など多様なバリエーションがみられますが、現在はそのほとんどが日常生活の利便性の面からサッシに変わっています。

図1-29　旧桶屋（仲町４）のみせの間

図1-30　旧呉服屋（本町１）のみせの間

⑷　茶の間・吹き抜け・天窓

茶の間は建物の真ん中にあり、天井を張らずに高い吹き抜けとなっており、日常的な接客の空間となっています。

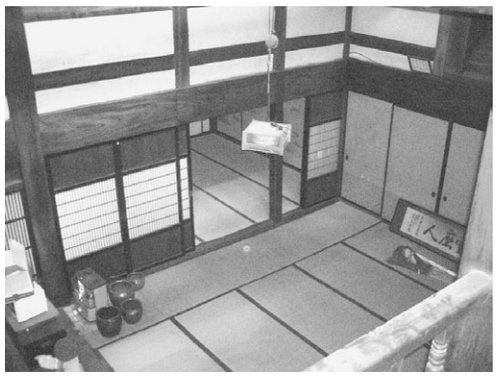


図1-31　旧呉服屋（本町１）の茶の間

図1-32　旧桶屋（仲町４）の天窓

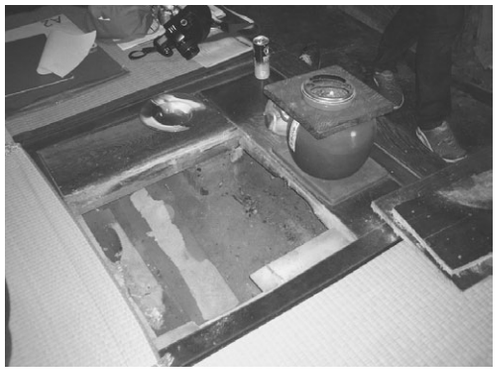


図1-33　旧桶屋（仲町４）の囲炉裏

茶の間上部では梁組が見えるようになっており、太径の自然財を用いて積雪に耐えうる構造体を形づくっています。

また、上部には天窓があり、建物の両側が隣家で、冬期間豪雪に埋もれることになる町家にとって貴重な採光の役目を果たしており、同時に囲炉裏の煙出しの機能も担っています。この天窓にも、屋根の上部に小屋が突き出ているものなど様々な形式があり、開口部の方角は大半が採光などに都合がよい東、南側を向いているものが多くなっています。

天窓からの採光の下、太い梁組や洗練された化粧貫が見られる茶の間の空間は、独特な美しさを醸し出しており、高田の町家の最大の見せ場となっています。

図1-34　旧呉服屋（本町６）の吹き抜け

図1-35　旧呉服屋（本町１）の吹き抜け

⑸　座敷

座敷には、床の間や仏壇があり、通り庭との境は壁で仕切るか、または小さな前室が設けられています。座敷には押入れがある場合もあり、客間と寝室を兼ねた空間となっており、裏の方には中庭が見えるようになっています。

図1-36　旧桶屋（仲町４）の中庭

⑹　表二階、裏二階、渡り廊下

みせの間の二階は表二階と呼ばれ、客間や細工場となっており、座敷の上の二階は裏二階と言われています。これらの部屋同士を行き来するために茶の間の吹き抜け空間に空中の渡り廊下がある家屋もあり、現代的な住居にはない魅力的な空間を形作っています。

また、建物によっては表二階、裏二階のどちらか一方の場合もあり、表二階の天井が低く物置として利用されている家屋もあります。

図1-37　旧呉服屋（本町６）の表二階

図1-38　旧呉服屋（本町６）の渡り廊下

⑺　台所・風呂・便所

台所、風呂、便所といった水回りは、土間の廊下の奥に設けられています。台所は採光や排水のために中庭に面しており、これらが配置されている廊下の屋根は片流れで中庭の方に流れています。

水回りが集まるこの空間は、洗濯物を干したり、漬物樽を置いたりする場所としても利用され、冬季に備えた空間の確保がなされており、雪国の生活の知恵を垣間見ることができます。

図1-39　旧桶屋（仲町４）の石造りの流し場

⑻　土蔵、納屋

母屋から中庭を隔てた敷地の奥には土蔵や納屋があり、土蔵をさらに家屋で覆う雨屋が設けられている家屋もあります。雨屋の二階に部屋を作り、これを裏二階という場合もあります。

⑼　屋根

屋根は、現在はほとんどがトタン葺きで、瓦葺きもわずかにみることができます。高田市史では、江戸時代には茅葺の町家もあったとの記述もみることができます。

２．雁木について

高田の町家の正面には雁木があり、多雪地帯である高田の町並みの特徴になっています。

⑴　雁木の呼称について

雁木とは、建築的には母屋につけた庇の呼称であり、地域によって呼称が異なります。

例えば、青森県の弘前では小見世（こみせ）といい、鳥取県若桜町では仮屋（かりや）と呼ばれています。

（次頁図1-40）

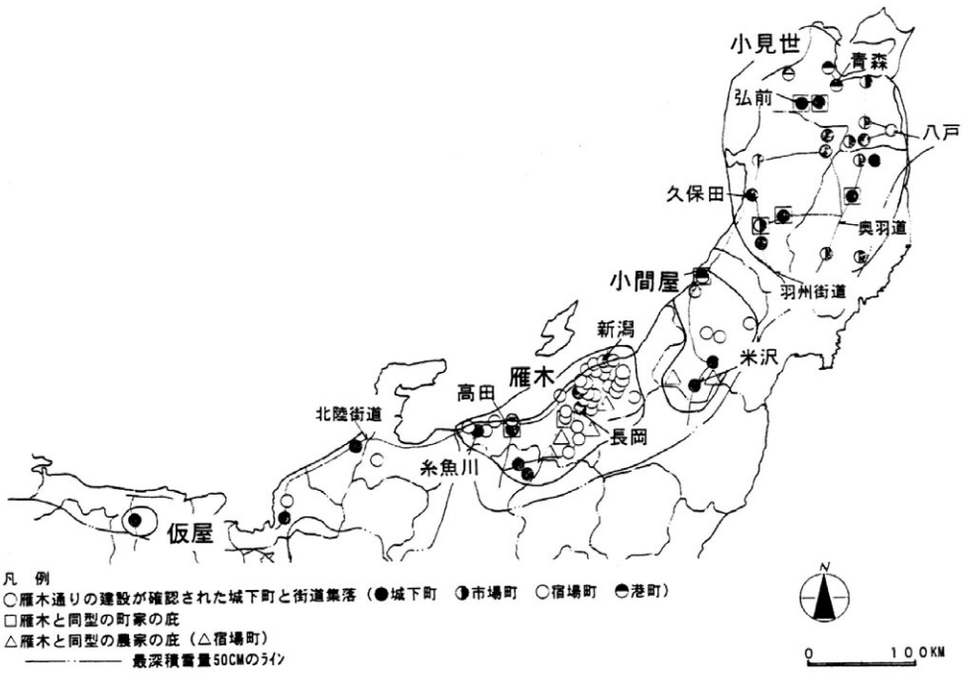


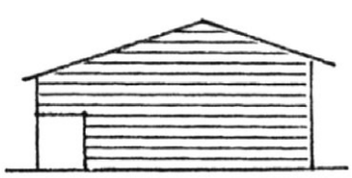
図1-40　全国の雁木通りの分布とその呼び名

出所）『雁木通りの形成と衰退に関する研究』（菅原邦生）より

⑵　雁木の種類

雁木の種類は大別して「造り込み式」と「落し式」の２種類があり、前者は母屋の屋根が前面道路のところまで連続して葺き下され、母屋の二階が突き出している部分を天井とし、これを連続する雁木柱が支えているもので、比較的古い町家に多くみられる形式です。後者は、母屋の外側に一階の高さに合わせて小屋根を付け足し、これを連続する雁木柱が支えているもので、現存している雁木のほとんどはこの形式です。

〈造り込み式雁木〉



〈落し式雁木〉

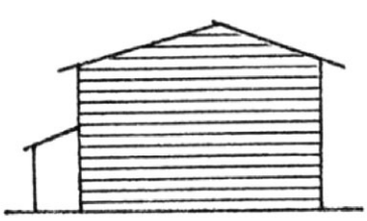


図1-41　雁木の種類

⑶　雁木の機能

雁木の本来的な機能は、冬場の積雪時に、降り積もった雪や、屋根から降ろした雪で前面道路が埋まってしまった場合にも通行を可能にするための通路です。

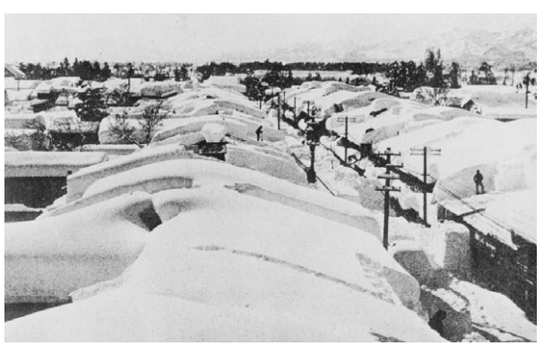


図1-42　昭和２年の大雪時の高田（仲町）

出所『ふるさとの想い出写真集 明治大正昭和 高田・直江津』（国書刊行会）より

現代のように機械での除雪が行われなかった当時は雪で埋まった道路の反対側に行くために雪のトンネルが作られていたそうで、その様子は、長岡市にある県立歴史博物館で実物大の模型で再現されています。

また、雁木の天井は雪樋（ゆきとよ）・梯子（はしご）などの道具の収納場所として利用され、雪国の生活には無くてはならない生活空間としての機能を持っていました。

図1-43　除雪道具

出所）『ふるさとの想い出写真集 明治大正昭和 高田・直江津』（国書刊行会）より

さらに雁木は、日よけ・雨よけ・車交通からの安全地・人々の憩いや会話のためのコミュニティスペース、照明や看板の設置場所、白菜・大根などの干し場といった副次的な機能もあり、降雪量が減り、除雪が行き届くようになった現代社会においてもこれらの多様な機能は高田のまちの生活・文化に大きな役割を果たしています。

図1-44　雁木通りと大根干しの風景（仲町）

⑷　雁木の価値

雁木の最大の特色は、雁木下の敷地が私有地であることです。雁木の敷地は、公権力によって用意された空間でなく、個人の土地から少しずつ捻出された空間の集積が全体として都市住民の便宜に共されているのです。

また、高田の雁木のもう一つの特色は、その連続性です。江戸時代に形成された高田の雁木通りは、現在も生活の中で息づいており、総延長約13キロ（稲田、直江津を除く）はダントツの日本一となっています。

このように、公共の用に私有地を提供するという共同体的社会システムに基づく雁木が、現在まで脈々と受け継がれている点は、高田のまちが全国に誇りうる文化であるということができるでしょう。

図1-45　雁木通り

市民研究員会議より

町家・町家暮らしの魅力と課題について

（市民研究員：関　由有子）

①雁木つたいに歩けるので、雨雪の日に便利
→雁木の途切れている場所が不便

②細長くて、建具を開放すれば、風が通りやすい
→格子や建具の形式により表から裏まで丸見え

③差し込んでくる光に対する感覚が鋭くなる
→昼間でも薄暗い空間がある

④光の陰翳にメリハリがあり劇的
→照明計画を考えないと目が疲れる（特に老人）

⑤表土間が多目的に使える
（風除室兼用で雨雪対応の空間）
→段差が不便

⑥家族の気配が伝わる
→個人のプライバシーが保ち難い
（町家でなくても日本家屋に共通。離れや２階の間取りを工夫すればよいのではないか。）

⑦防犯の意味では一軒家より比較的安心
→油断すれば危ない

⑧夏はまあまあ涼しい
→冬はすごく寒い（シモヤケができるほど）

⑨ご近所との関係は人それぞれ
（家族で住んでいれば、老人会・婦人会・子供会などそれなりのおつきあいはあるだろうが、都会のマンションのようなところでなければ何処でも同じ程度ではないか）

⑩家そのものが生き続けているような有機的な印象
（特に、通常は太い柱梁や胴差、細い貫がアラワシになっているので、その印象が強い。真壁構法であれば一般家屋でも同じかもしれないが、細長いが故に妙に迫力あり。）

⑪落ち着いたのんびりした生活のよさがある
→特に昼間家にいる人にはスローライフ的

⑫細長い敷地の裏に、庭や小さな畑があるので、自然とのふれあいがある
（高層マンションや木賃アパートよりも、はるかに有利）

⑬駐車場の確保が問題
（特に複数台所有の場合、除雪も含めて。）

市民研究員会議より

町家・町家暮らしの魅力について

（市民研究員：磯田　一裕）

■町家の魅力について

①高い吹き抜け天井を持つ。

→低い天井部分との対比でより高く象徴的に感じられる。断熱リフォームで吹き抜けを元に戻すなど可能。

②基本となる骨組み、骨格を変えなくても用途変更やリフォームなどが比較的容易。（懐が深い形式・構造）

→活かし方の方策は色々ある。

■町家暮らしの魅力について

①人間がおおらかになる。

（隣の音だとか、多少のことは気にしなくなるし逆に聞こえなくなると、どうかしたんじゃないかと心配になったりする。（お互い様、お世話様））

②隣に人がいる、いっしょに住んでいるという安心感がある。

③人と自然の連帯感が感じられる。

（雁木や壁でつながっているという気持ち。都心でありながら裏の庭や畑を持つことができる。→「地域力」がある）

④時間がゆっくり流れる感じがする。

⑤空気がしっとりしていて落ち着く感じ。

⑥町家暮らしの中に家族の有り様、家族の関係を問う、あるいは見直すキーワードが有る。

（暮らしの思想のようなもの）

■これから大切なこと

本質的には②、③、⑥のような部分を、町家を通していかに考えるか、大切に思うか、将来何を次の世代に引き継いでいくかという部分を考えることが町家の魅力とつながるのではと思います。